

『いゝろ』再考

——〈親子関係〉を中心として——

呉 敬

漱石文学のテーマである「自我」を押し通す近代人の運命が、突き詰めた自己否定にまで至るといふ、知識人の苦悩が描かれている『こゝろ』（大正三年四月～八月）は、いまでも多くの研究者や批評家の知的好奇心を刺激してやまない作品である。これまでも膨大な数の論文が書かれているにもかかわらず、『こゝろ』をめぐる論は尽きることなく公表されている。これは、『こゝろ』が「分り難い部分、不透明な箇所」を持ちながらも、「不思議な迫力と魅力」で人々の心を引きつけるからであろう。そしてそれとともに、きちんとした完結性を持っていないことがかえって多様な解釈を誘うために知的好奇心をかきたてるのであろう。

周知のごとく、『こゝろ』の解釈は、明治精神に殉死する〈先生〉の倫理性を強調した従来の解釈から、語り手の〈私〉と〈先生〉との葛藤のドラマ、〈私〉が〈先生〉の奥さんと「新たな生を共に生きる」男女の性愛の物語¹、さらには、より大胆な解釈として、同性愛の物語として捉えるところにまで至っている。このような多様な解釈の試みからいって、今後いかなる解釈が出されてくるか予想もしたいのだが、「不思議な迫力と魅力」を示す『こゝろ』の不透明さが依然解消されていない以上、『こゝろ』の解釈はさらに新たな展開を示していくに相違ない。

本稿は、物語の内容に対しての多様な解釈に新しい別個の解釈を加えるというよりは、登場人物の〈家族関係〉、特に〈親子関係〉のありようがこの物語の構造とどのように関わるかに重点を置いて、『こゝろ』の再考を試みようとするものである。ここでことさらに「再考」というのは、筆者にはすでに『こゝろ』論⁹があり、本稿がその続論をなすよう

に企図されているからである。「再考」にあたって、本稿が〈親子関係〉の視座から『こゝろ』の物語構造を分析しようとするのは、『こゝろ』に示されている〈親子関係〉のありようが物語の構造に深い影響を及ぼしていると同時に、このような関係のうちに漱石の原体験によって形成されたと思われる「心の核」、つまり「乳幼児期頃までの生活によってかたち作られ、その後も心の世界の核心に存在し続けて、成長してからの人間をも根本のところ働き動かす原動力になるもの」⁽¹⁰⁾で、それによって「人間の生き方が基本的に決まる面がある」⁽¹¹⁾、というものの投影が確認し得るからである。「人間の生涯を（中略）基本的に支配する」という漱石の「心の核」は、かれの乳幼児期における家族との関係のなかで形成され、それが少年期から青年期を経て、漱石自身、一家を構え自分の家族をかかえるようになった後、この『こゝろ』の執筆に至る当時まで依然としてかれの精神にはたらきかけ、小説の登場人物の運命を決定し物語構造にも影響を与えていると考えられる。そのような漱石の「心の核」の形成に〈家族関係〉が大きく関わり、それによって家族に対する漱石に固有な観念がかれの心の世界を支配しつづけていたであろうと思うのは、次の二つの事実をもつて推察でき得るからである。すなわちその一つは、漱石の小説の中に作品の舞台を家族の範囲に限定して〈家族関係〉を追求したものが多くこと、いま一つは漱石の乳幼児期の〈家族関係〉が尋常のそれとは異なるものであって、その〈家族関係〉の観念がかれの小説の中の〈家族関係〉に色濃く反映していると認められることである。

そこで、漱石の描く〈家族関係〉が具体的に作品の中にかなる様相を呈しており、それが物語の中でいかなる意味と機能を果たしているのかを分析し、そこに漱石の「心の核」なるものの投影を確認してみようと思う。行論にあたって〈家族関係〉を規定しておくならば、それは〈親子関係〉、〈夫婦関係〉、〈兄弟関係〉、〈親族関係〉に分けられるが、ここではそれをとくに〈親子関係〉に限定し、これを通して『こゝろ』の物語構造を分析することにする。

二

『こゝろ』の構成を概括すれば、語り手の〈私〉という青年の眼（視点）を通して〈先生〉と〈私〉、それに両親と〈私〉の関係が語られ、それに続いて〈先生〉の遺書という〈先生〉の告白から成り立っている。この小説は以上の三つのモチーフによって上中下の三部構成となっているわけである。それをさらに詳しくいえば、まず上の章の「先生と私」では、〈先

生」を敬愛する地方出身の学生である「私」が、「先生」との交際の経緯や、かれの眼を通して「先生」の姿を語ることによって、恐ろしい過去を秘めた「先生」の、どこかしら謎めいた姿が外部から描き出されていく。次の中の章の「両親と私」になると、上の章において視点人物であった「私」が大学を卒業し、帰省して郷里で経験する両親との交渉が語られる。ここには、次の下の章で明治精神に殉死する「先生」の自殺のための伏線として、病床についた「私」の父の、明治天皇の崩御と乃木大将の殉死に対する反応が精緻に描かれている。そして最後の下の章の「先生と遺書」では、その正体が依然として分からない「先生」を包んだ謎が、郷里にいる「私」に届いた「先生」の手紙（遺書）によっていよいよ分かるようになる、いわば謎解きに当たたる章である。以上のように、物語は上と中の章で少しずつ仄めかされてきた「先生」にまつわる謎が下の章で解かれるように構成されている。ただこの小説における物語内の時間としては、「先生」の遺書（告白）が自分の不幸の最初の原因から始まっているところから、もしもこの小説の人間関係を「先生」の人生史を通して据え直すとすれば、むしろ下の章がまず検討されねばなるまい。というのは、「親子関係」を通して物語構造を考察しようとする本稿にとつては、小説に仕掛けられた遡及的時間の構成を一旦ほぐして、「先生」にとつての「家族関係」と「親子関係」をかれの人生史的時間に沿って解説する必要があるからである。

ところで『こゝろ』という小説にとつて、どうして「家族関係」とくに「親子関係」の視座が重要なのであろうか。いまそれを二つの象徴的な場面から指摘しておこう。その一つは、「私」が「先生」の遺書を受け取る場面である。そのとき「私」は、「此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んであるでせう」（中一七八）という一句を読んで「はつと思」い、「たゞ先生の安否だけ」（同前）を氣遣つて「昏睡状態に陥つた」（中一七十七）父を放つて、東京行の汽車に乗ってしまう。家の維持が最優先であった家制度下では、家父長としての父親は一家の頂点に位し、全権を掌握しているものであつて、そのイメージは恐いものとされていたので、子供との関係が今日の核家族の親子から見られるような、情愛に満ちたものではなかったかもしれないが、この「私」の思いと行動は父親との断絶を示すきわめて印象的な場面となっている。これには当時の家制度下の「親子関係」の反映のほかに、明治三十年、亡くなつた父親の死に際して漱石が覚えた感懐を彷彿とさせるものがあるのではないだろうか。漱石は当時の感懐を、明治三十九年十二月二十二日の小宮豊隆宛の手紙に「おとつさんを持つより厄介な事はない。僕はおやぢで散々手コズツタ。不思議な事はおやぢが死んでも悲しくも何ともない。旧幕時代なら親不孝の罪を以て火あぶりにでもなる伴だね」と書き、大正

二年九月十五日の寺田寅彦宛の手紙には「小生は無法ものにて父の死んだ時勝手に何処へでも出あるき申候最も可笑しかりしは其節友人の父も死にたれば茶の鐘か何か携へて弔みに参り其友人に変な顔をされた事に候」と書いている。父親に対する漱石の感情がこのように冷淡であつたからこそ、『こゝろ』の執筆にあつて、小説の視点人物でもある〈私〉をして上記のごとき行為をいわば衝動的になさしめたものではなからうか。『こゝろ』の〈私〉と父親との関係には、家制度下の〈親子関係〉とともに漱石の経歴のなかにきざみこまれた〈親子関係〉が、知らず知らずすべり込まされていると考えられるのである。

いま一つの場面は、暗く深刻な人間関係が重い口調で語られていくこの小説の中で、唯一ふと解放されたような、明るい気持をおぼえさせられる印象的な挿話である。それは、論文を書き終えた〈私〉が〈先生〉を誘つて散歩に出掛けた際に偶然眼にする植木屋の親子の姿である。その姿は、この小説の主要な登場人物を重く、そして冷たくからめとつていゝる〈親子関係〉からは感じられない美しくて暖かい雰囲気をも漂わせている。「躑躅が燃えるやうに咲き乱れてゐる」(上―二十六)る美しい園で、「十位の子供」(上―二十八)が犬と楽しげに駆け回つてゐる。縁側には「御上さんが、十五六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけてゐる」(上―二十九)る。物語の内容とは全く関係のない一つの挿話として描かれているこの平和な情景は、『門』(明治四三年三月―六月)の崖上の坂井家の親子からもうかがえる。「大勢の小供が崖の上へ出て騒」(七)いだり、「ピアノを鳴らし」(二)たり、「悪戯をする」(九)など陽気に過ごす姿と、「口で子供を煩冗がる割に、少しもそれを苦にする様子の、顔にも態度にも見せない」(同前)父親の姿は、この植木屋の〈親子関係〉とともに、かつて享受し得なかつた幼い日の漱石の希求してやまなかつた〈親子関係〉の理想ではあるまいか。

『こゝろ』の物語構造に織りなされてゐる人間関係を、この小説の内部と外部の双方から機制してゐるところの〈家族関係〉や〈親子関係〉の両極が、実はこの二つの場面に象徴されてゐるとみてよいのではなからうか。物語内の現実の人間関係を極端なかたちで象徴してゐるのは、前者の場面から読みとれる〈私〉と父親の間のきわめて希薄な〈親子関係〉であろう。しかし、それにもかかわらず、その現実の人間関係のいま一方の極北に遠くみつめられていたのが物語内の現実からまるで超越してゐるような、後者の一挿話にみられる植木屋の親子が牧歌的に寄り添う〈親子関係〉であるとみられる。しかし、『こゝろ』に描かれてゐる主要な登場人物の〈親子関係〉は、この挿話の植木屋の親子のように明るくて肯定的な関係ではなく、前者に象徴されるように、ことごとく暗くて否定的な様相を呈してゐる。

そこで、あらためて〈先生〉にとつての〈家族関係〉や〈親子関係〉を、かれの人生史の時間に沿つてなぞつていこう。というのは、最後には自殺にまで追い込まれていく〈先生〉の悲劇の種は、青年時代、信頼していた叔父に手ひどく裏切られた時に蒔かれたからである。〈先生〉はまだ二十才にならない時に腸チフスによつて父と母を相次いで失つた。そこで〈先生〉は信頼していた叔父にすべてを任せて、郷里を離れて東京の高等学校に入ることとなつた。ところが〈先生〉の在京中に、その叔父が〈先生〉の財産の大半を横領してしまい、その横領を糊塗するために、自分の娘と〈先生〉を結婚させようと策略を弄するのであつた。その一部始終を知つてしまつた〈先生〉は人間不信に陥り、一度と戻らぬ決意で、残された父の遺産をすべて金に替えて故郷を去つたのである。このように〈先生〉がはじめて人間不信に陥つたのは、叔父に裏切られたことが原因してゐた。しかし、考へてみれば叔父の裏切（財産の横領）は、〈先生〉の財産を管理したところに起つたのであつて、その点からいへば、〈先生〉の人間不信は、結局のところ財産のある両親の死に起因するといえる。しかもさらに不幸なことには、この両親からの遺産は、援助するつもりで引き取つたKを〈先生〉が裏切ることになる、その前提ともなつてしまふのである。やや穿つた見方をすれば、両親の死こそが、〈先生〉自身もKを裏切ることとで自己不信に陥り、深い罪の意識を背負うに至る遠因となつてゐるといえるのではなからうか。

「国を立つ時既に厭世的になつてゐ」（下―十二）た「金に不自由のない」（下―十）〈先生〉は、それまでの学生時代から借りてゐた「騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構へて見やうかといふ氣になつ」（同前）て、新しい借家を探してゐたところ、偶然、軍人の未亡人が経営する素人下宿に紹介され、その下宿人になる。〈先生〉は、下宿屋の奥さんと女学校に通つてゐる御嬢さんの善意ある日々の応対によつてほしいに人間不信の人生觀を癒されるようになるのだが、それとともに、御嬢さんをひそかに愛するようになっていった。この下宿生活は、〈先生〉の人生にとつては、厭世的な人間不信から逃れられる絶好のチャンスであつた。しかし、〈先生〉の「余裕ある」「学生生活」は、親友のKを自分の下宿に引き入れ、御嬢さんをめぐつて二人がライバルにならざるを得ない状況となることで、〈先生〉を「思ひも寄らない境遇に陥し入」（以上、下―九）ることとなる。

親友のKは、〈先生〉の同郷の親友だが、道を求める頑な生き方のために養家を追われ、また実家からも見放されて、経済的な苦境に追い込まれていた。〈先生〉は、このようなKの苦境を見かねて「溺れか、つた人を抱いて、自分の熱を向ふに移してやる覚悟で」（下―二十三）、奥さんの反対を押し切って「引き取」ったのである。〈先生〉がKを自分の下宿に同居させる〈真の意図〉についての解釈はさまざまであるが、なかでも、最近になって公表された小森陽一氏の見解はきわめてユニークなものである。「サムライ的な自己形成の契機を孕んだホモセクシユアルな感受性が、「先生」とKとの間で発生していた⁽¹⁶⁾」と考える氏は、「奥さんと御嬢さんとの共同生活へKを招きいれるという、一見善意と友情に裏打ちされたかに見える「先生」の提案は、（中略）幾重にも重なったKとのそれまでの関係への裏切りあるいは、なまじくずし的な転向の強制によって構成されている」と述べている。すなわち『こゝろ』を、同性愛者〈先生〉とKとの間で演じる「男同士」の「恋」のドラマとして捉えており、したがってその中で醸し出される人間の我執の恐ろしさを以て、「恋は罪悪ですよ」（上―十二）という〈先生〉の言葉をホモセクシユアルな関係性という文脈で理解しようとするならば、氏の見解も首肯できないことはあるまい。

この小森陽一氏が代表するように、〈先生〉がKを自分の下宿に招きいれる〈真の意図〉がいかなるものであるかについては十分理解できるところであるが、しかし〈先生〉の不幸な〈家族関係〉から産み出された父の遺産がなかったならば、そうしたことも実現できず、文字通り意図のままに終わって、〈先生〉の運命は変わっていたらうということである。むしろKを下宿に引きとるといった意図などは、初めから持てなかつたらうといったほうがいいかもしれない。

ところが、Kを同居させることによって、その人間関係のなかに悲劇が起こってしまう。というのは、まもなくKから御嬢さんへの恋を告白されたことで、〈先生〉はかえって、Kを出し抜いて、奥さんに結婚の許しを求め、Kを自殺に至らしめてしまうのである。しかし、このKの死に衝撃を受け、「策略で勝つても人間として負けた」（下―四十八）と感じた〈先生〉は、「自分もあの叔父と同じ人間だと意識し」（下―五十二）、「自分にも愛想を尽かして動けなくなつ」（同前）てしまう。そのために、御嬢さんと結婚した後は、「書物の中に自分を生理^{いきみ}」にしたり、「酒に魂を浸して、己れを忘れやうと試み」たりすることで、〈先生〉はみずからの思いとは逆に、「自分の最も愛してゐる妻」（以上、下―五十三）を苦しめたり、泣かせたりしながらしだいに孤独に落ち込んでいってしまう。ただそれにもかかわらず、結婚して一家を構えた〈先生〉が定職につかなくとも、それなりの生活を維持し得たのは、やはり父の遺産があつたからである。もしも〈先

生」に父の遺産がなかったならば、小説に描かれるような生活は到底できなかつたろう。それどころか、妻とその母の扶養のために定職につくことを余儀なくされ、「世の中と戦ふ」(下―四)ことで、自己の煩悶は後に回され、おそらく異なる結末になつたかもしれない。

「親から財産を譲られた」(先生)は、「世の中と戦う必要がないから」(以上、下―四)、かえって自己との戦いに精根が尽きて、「明治の精神に殉死する積」(下―五十六)で自殺してしまうのである。結局のところ、御嬢さんとKと(先生)の人間関係の葛藤と、その深刻な結末を機制していたのは、小説内の時間枠を超えた過去において、両親の死によって(先生)に遺産が残されたことに起因していたといつてもよからう。しかし、この三人の不幸がすべて(先生)の両親の死のみに関わっているのではない。実はKにも御嬢さんのいずれにも、(先生)と同じように(親子関係)の欠損という不幸の原因があつたことを見逃してはならない。

親友のKが(先生)の同居の提案を渋々受け入れざるを得ないほど切迫していたのは、医者となるということと学費を出してもらっている養父母を欺いて、「自分の好きな「道」を歩」(下―二十)いた結果、「養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うやうにな」(下―二十一)つたからである。「真宗の坊さんの子」で「ある医者いしやくの所へ養子に遣られた」(下―十九)Kの、「養家の希望に背いて」(下―二十一)みずからの「道」に対する理念を貫く、その「頑固」な性格の原因について(先生)はこう言っている。

Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事が出来るやうです。もし彼の実の母が生きても、或は彼と実家との関係に、斯うまで隔りが出来ずに済んだかも知れないと私は思ふのです。(同前)

Kと養家との間のもめごとの発生は実の母が死んで「継母に育てられた結果」としての彼の性格のためであり、もめごとが起こつた後の「彼と実家との隔り」があれほど大きかつたのも「実の母が生きてゐ」ないためであると(先生)は思ふのである。結局、Kの母の死がKをして(先生)の下宿、すなわちあの悲劇的なドラマが演じられる舞台への登場を余儀なくさせられたのである。そして、Kが親切な奥さんと御嬢さん(先生)は奥さんと御嬢さんになるべくKに親切にしてあげるように頼んでおいた)にひかれて自分の求道の生活が揺すぶられたというのも、このようなKの経歴に秘めら

れる「親子関係」の欠損を心理的に補償しようとする潜在意識が欲求した行為なのかもしれない。

御嬢さんにおける「親子関係」の欠損とはどういうことであろう。御嬢さんの父は「軍人」であつたが、「日清戦争の時か何かに死んだ」のである。未「人の奥さんとその一人娘の御嬢さんが、「一年ばかり前まで」「住んでゐた」所から「引越して来た」理由は「邸が広過ぎる」からであり、下宿人を探した理由は「無人で淋しくつて困るから」（以上、下十）である。もしも御嬢さんの父が生きておれば、「邸が広過ぎる」とも「淋し」いとも思わなかつたらうし、したがつて「引越して来」ることも下宿人を探すこともしなかつたに相違ない。御嬢さんの父の死は、「先生」、K、御嬢さんと「引越して来」ることも下宿人を探すこともしなかつたに相違ない。御嬢さんの父の死は、「先生」、K、御嬢さんと

以上にもみるように、「先生」を始めとする三人の人間関係にからむこの悲劇的なドラマは、それぞれの自己の親の死によつてもたらされた不幸な「親子関係」の欠損が絡み合つて展開されるのである。もちろん、かれらの親たちの死は、すでに佐々木充氏が指摘している通り、ストーリーの中で惹起するのではなく、小説世界を超えた過去においてすでに起きていたことであつた。それゆゑに注目するに足りないと思いがちであるが、決してそうではない。この物語における三人の主要な登場人物をめぐる人間関係の葛藤と悲劇は、かれらの親の死、すなわち「親子関係」の欠損を前提にして構成されているのであつて、親の死は物語の構造において大変重要な役割を果たしているといえる。「先生」とKにとっては母親の不在（ただし「先生」にはすでに父親もいないが、ここではそれは無視できる）、御嬢さんにとっては父親の不在という、それぞれがかかえる「親子関係」の欠損が、御嬢さんの中には「先生」とKの葛藤を機制しているのであつて、かれら三人の人間関係には若者の恋愛感情のほかに、母親の不在の代償行為として「先生」とKが御嬢さんに惹かれたし、それに対して、御嬢さんが二人に親切であつたのは、これまた父親不在の代償的欲求があつたからであつたと読みとつてもよいのではなからうか。要するに、『こゝろ』に見られる親の死は、すべてが物語における人間関係の葛藤と不可分の関係を有して、そのことが物語の悲劇を惹起する外部の枠組みとなつているのである。

四

本章では、視座をこれまでとは異なつて、生存している父親に移して、子供との関係を考察してみよう。まず、語り手

の〈私〉と父親との関係から始めたい。

田舎の古い家で慢性の腎臓を病んでいる〈私〉の父は、卒倒した自分の見舞いに東京から〈私〉が「母の云ひ付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰つて来た」(上―二十二)ことに「大きな満足」(同前)を感じている。確かに、病気になるた親が遠く離れている子供に会いたいと思うのは人情の常であろうが、〈私〉が帰省したその翌日から母の止めるのも聞かずに、床を上げさせたことを見ても、持病がそれほど悪くなつたわけではない。それにもかかわらず、〈私〉の父は、「出来るなら都合して帰つて来てくれと頼むやうに」(同前)書いて送つた母の手紙に応じて〈私〉が帰つてきたことに「大きな満足」を覚えていた。そんな父は「勝つても負けても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる」(上―二十三)人物であり、〈私〉が「卒業が出来」たことを「御前に取つてより、此おれに取つて結構」(中―一)だと思ひ、〈私〉が断るにもかかわらず、「彼等(郷里の村人―引用者注)の陰口を気にして」(中―三)卒業の祝いを企てる。そのようなところに家父長として家の体面を重んずる父親の性格がよくあらわれている。この父と〈私〉との関係は〈私〉の口を通して次のように語られる。

父はしばらくそれ(大学卒業の証書―引用者注)を眺めた後、起つて床の間の所へ行つて、誰の目にもすぐ遠入るやうな正面へ証書を置いた。何時もの私ならず何とかいふ筈であつたが、其時の私は丸で平生と違つてゐた。父や母に対して少しも逆らふ気が起こらなかつた。私はだまつて父の為すが仮に任せて置いた。一旦癖のついた鳥の子紙の証書は、中々父の自由にならなかつた。適当な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢を得て倒れやうとした。(中―一)

父が平生の〈私〉に対する不満を、「学問をさせると人間が兎角理屈っぽくなつて不可ない」(中―三)と漏らしていることと結びつけて考えると、「一旦癖のついた鳥の子紙の証書」が「中々父の自由にならな」という、なにげない小道具の描写は、「学問」をした〈私〉が父の言うことに理屈を言つて素直に従わないことの隠微な表現といえよう。そうだとすれば、証書が「適当な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢を得て倒れやうと」するのは、父が〈私〉を自分に従わせようとしても、そのたびに〈私〉が父に逆らうことでその努力もむなしくなつてしまふといった、しつくり行かない父子関係の暗示として捉えるべきではなからうか。

母は〈私〉に父が健在なうちに就職口を決めて、父を「喜ばして上げるやうに親孝行」（中一十二）を迫る。〈私〉から見れば、田舎の両親はまさに家の維持をなによりも優先する家父長と、その權威に盲従する妻にすぎなかった。〈私〉が「父の希望する地位を得るために東京へ行く」（中一八）という口実の下に「いつそ早く東京へ出てしま」（中一七）おうと思ひ、「愈々立とうといふ間際になつて、父は又突然引つ繰り返」（中一九）つて上京をさへぎるのである。

こうした父親に対してとる〈私〉の態度はといへば、心のうちで父と〈先生〉とを比較し、自分において父は、「単なる娯楽の相手としても（中略）物足りな」（上二二三）い存在であるときげすんだり、「無知から出る田舎臭い所に不快を感じ」（中一一）たりする。しかし、父は父で「自分が死んだ後」、母がたった一人田舎の家に取り残されることを心配しながらも「東京で良い地位を求めると云つて、私を強ひたがる」（中一七）のである。そんな父の矛盾を「可笑しく思つた」（同前）りもする。しかしながら〈私〉は、軽蔑している父にむかつて「当分今迄通り学資を送つて呉れるやうに」（中一八）頼み、それに頼つて再上京を企てるのである。このような父と甘えの抜けない子供の間のねじれた父子關係に慈愛と敬愛の念が湧き起こるはずがないのはいうまでもない。〈私〉が〈先生〉にひかれて強く影響を受けるゆえんは、この疎遠な〈親子關係〉にあるとみてよからう。

奥さんと御嬢さんの場合は、母と娘二人ぎりの家族で、奥さんは、下宿人の〈先生〉が「奥さんの様子を能く觀察してゐると、何だか自分の娘と私とを接近させたがつてゐるらしくも見える」（下一十四）と疑念を抱くほど、その一人娘の将来に心を配っている。当初、奥さんは、下宿人になりたいと「大学の制帽を被つて」来た〈先生〉に會つて、「身元やら学校やら専門やらについて色々質問し」て受け入れたのだが、それは自分の娘の将来の婿としての可能性を念頭に置いて「是なら大丈夫だといふ所を何所かに握つた」（以上、下一十）からである。こうした娘に対する奥さんの親心は、のちになつてKが自殺した時、罪意識にとらわれた〈先生〉がその前に手を突いて「済みません。私が悪かつたのです。あなたにも御嬢さんにも済まない事になりました」（下一四十九）と懺悔したにもかかわらず、この言葉のもつ深い意味が理解できず、かえつて「不慮の出来事なら仕方がないぢやありませんか」（同前）と慰め、娘と〈先生〉の将来を思ひはかつて、Kの死後の後始末をつけてしまう。そのお陰で〈先生〉は誰からも疑われる事なしに、希望通り御嬢さんと結婚することができたのである。

外面的には奥さんの後始末で万事思い通りになつたように思われるが、そのことにかえつて〈先生〉はまた、自分には

到底背負い切れないほどの罪の重荷を背負わされることになる。こうした〈先生〉の罪意識が、妻となった御嬢さんに響かないはずはない。しかし、〈先生〉がなぜいつもなにかに悩んでいるのが分からない妻は、〈先生〉の悩みは自分のせいだと思ひこみ、「度々何処が気に入らないのか遠慮なく云つて呉れと頼」んだり、「ある時は泣いて『貴方は此頃人間が違つた』」（下―五十三）、「男の心と女の心とは何うしてもびたりと一つになれないものだらうかと云」（下―五十四）つたりして苦しむのである。「私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべき筈です」（上―十）という〈先生〉の述懐、つまり幸福な人間と言ひ切らずに、「あるべき筈」であると断つたところからも察せられるように、Kの死という犠牲の上に成り立つこの結婚生活は幸福ではなかつたのである。結局のところ御嬢さんは、〈先生〉の罪があらさまになることを防ぐ役割を演じてしまった奥さんのために、かえつて不幸な結婚生活を余儀なくされたといわざるを得ない。人（親友）の犠牲の上に成り立つ結婚生活が幸福でないということは、『門』の宗助と御米夫婦からも垣間見ることができ。

御嬢さんと〈先生〉を結婚させた後、奥さんは病氣（腎臓病）になる。そのためにみずから世間と切り離していた〈先生〉にとつては、かえつて「力の及ぶかぎり懇切に看護」をして「始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたといふ自覚を得」て、「罪滅し」の「気分支配され」る機会が提供されることになつた。このことは、Kの死に対する深い罪意識から「何かしたくつて」も「何もする事が出来な」（以上、下―五十四）かつた〈先生〉の心の傷を癒してくれる代償行為となつてしまふのである。しかし、この新たな〈家族関係〉が成立したからといつて、その関係が〈先生〉の死を救うことはできなかった。〈先生〉は一人ぼっちになつて死を選ばざるを得ないほど孤独だったのである。

『こゝろ』にはこのほかに二つの〈親子関係〉が描かれている。〈私〉の友達と両親、〈先生〉の叔父とその娘との関係がそれである。これらは物語の主題と直接関わっていないのであまり注意されていない。が、それらは主要な登場人物たちの〈親子関係〉と総合されることで、この小説の背後に隠れている作者漱石の家族や親に対する固な観念をうかがわせるようになるところからいって、見逃すわけにはいくまい。

たとえば友達と両親の〈親子関係〉をみてみよう。〈先生〉は「暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達」から「是非来いといふ端書」（上―一）を受け取つて鎌倉に行く。ところが、〈先生〉が着くやいなや、友達は母の病気を理由に国元の両親に呼び戻される。

電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にある親達に働まない結婚を強ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するには年が若過ぎた。それに肝心の当人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに当然帰るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。(上一一)

〈先生〉のこの説明によると、友達の両親は〈私〉の両親以上に家父長の權威を振つてゐることが分かる。子供の意見や希望などは一尙考慮しない。本人の感情が無視されたまま親に結婚を強いられるという〈親子関係〉は、家父長の意志が絶対視される家制度そのものを反映している。このような家父長の權威が子供に及ぼすかをよく物語つてゐるのが、〈先生〉の叔父と娘の〈親子関係〉である。叔父は「下卑た利害心に驅られて」(下一九)娘を〈先生〉と婚させようとする。というのは、叔父は〈先生〉の財産横領を内輪の問題として処理するために、お互いに「愛してゐない」(同前)娘を〈先生〉と結婚させようとしたのである。叔父の「策略」は〈先生〉の断りで破れるが、「結婚の申し込を拒絶された」(下一六)娘は、父のいけにえとして心を傷つけられてしまう。この二つの〈親子関係〉の描写によつても、主要な登場人物の〈親子関係〉の周縁には、いまだ家父長の意志が絶対化された家制度がとりまいてゐるのであつて、むしろ小説の当時にあつては、このような家制度がいまだ一般的であつた。このような社会を背景にして、家父長としての父親をなくしている点で境遇を同じくする主要な登場人物たちの人間関係の葛藤の文脈を読み解く必要がある。

五

登場人物の親の早死については、すでに佐々木充氏が前記論文で十五篇にわたる長編小説の分析を通して、それが漱石小説の基本設定・基本趣向であることを指摘しているもので、ここではその親の死が子供の不幸の原因になるというストーリーの始発のモチーフとなることを強調しておきたい。親が生存している場合には、慈愛と敬愛の念に溢れる緊密な親子関係ではなく、『こゝろ』の〈私〉と父親・『坊っちゃん』のおれと生存時の父親・『それから』の代助と父親・『道草』の健三と実父・養父、『行人』の一郎と娘の芳江・『道草』の健三と子供との関係にみるように、〈親子関係〉が断絶しているか、子供に対して心を開き、いつくしむことのない家父長的權威につつまれたような父親像が描かれていて、し

かもその描写に当たつての作調（トーン）は、暗くて否定的である。漱石の描く「親子関係」がどうしてこのような様相を呈しているのであろうか。それは漱石の心の中に親に対する否定的な観念が焼き付いていたからに相違ない。

周知のごとく、漱石は、父夏目小兵衛（直克、五十才）と母ちゑ（千枝・後妻、四十二才）の晩年に生まれた末っ子である。すでに二女三男を設けたうえ家運も傾きかけていた頃に生まれたかれは、歓迎されない余計者に過ぎなかった。乳母のなかつたことも原因となり、生後ただちに四ッ谷の古道具屋（源平衛村の八百屋ともいわれる）に里子にやられたが、まもなく生家に戻る。この頃のエピソードを漱石は『硝子戸の中』（大正四年一月―二月）で次のように語っている。

私は其道具屋の我楽多と二所に、小さい筈ざるの中に入れられて、毎晩よつや四ッ谷の大通りの夜店に曝さらされてゐたのである。それを或晩私の姉が何かの序ついでに其所を通り掛つた時見付けて、可哀想とでも思つたのだらう、懐へ入れて宅うちへ連れて来たが、私は其夜どうしても寝付かずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたさうである。（二十九）

暖かい母親の愛と情緒的な安定を最も必要とする乳児期に、漱石は母親のもとから切り離され、「小さい筈の中に入れて」毎晩夜店に晒さらされていた。それどころか、生家に戻っても母親の乳がでなかつたため、貰い乳をしてもらつた。したがって、母乳を飲んだ期間が全くなかつたか、きわめて短かつた漱石に母親とのスキンシップがあるはずがない。このスキンシップの欠如について荒正人氏は、漱石自身が記憶してはいないが、直接、間接に聞いてぼんやり知っているそれが潜在意識または固定観念となり、精神形成史に重苦しく定着したと推定されると指摘しているが、母親から切り離され、情緒的に落ち着かなかつたこうした乳児期の体験が、漱石の「心の核」の基底を成しているといつてよからう。「心の核」は乳幼児期頃までの生活によつてかたち作られるからである。

ところが、漱石の乳幼児期における不幸な境遇はこれで終わらず、まだ続くのである。「其里から取り戻され」、「ぢき又ある家へ養子に遣られ」、「物心がつく八九歳迄其所で成長」（同前）する。養父母塩原昌之助とやす夫婦には実子がなかつたため彼を独占したいという偏つた愛情で育てられたので、かえつて彼らに対する反発心を募らせていった。この前後の事情については、漱石の自伝的な小説『道草』（大正四年六月―九月）に詳しい。「心の核」の形成期にあたるこの時期の養父母との関係が、漱石に親に対する否定的な観念を抱かせる一要因であつたことは疑いの余地がない。

やがて養父母の間に不和が生じ、漱石は塩原家に在籍のまま九才の時夏目家に引き取られる。『硝子戸の中』二十九章に書かれているこの頃の漱石の記憶をみると、「浅草から牛込へ移された当時の私は、何故か非常に嬉しかった。さうして其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現はれた」とある。養家から実家に移ったことを子供心にも喜ぶ姿がよくうかがわれるが、かれ自身の期待に反して、かれは「普通の末ツ子のやうに決して両親から可愛がられなかつた」し、「とくに父からは寧ろ苛酷に取扱はれた」と記憶している。当時の実父に対する漱石の心理状態が、幼い日の健三の心に託されて『道草』の中にこう書かれている。

実家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しに斯んな出来損ひが舞ひ込んで来たかといふ顔付をした父は、殆ど子としての待遇を彼に与へなかつた。今迄と打つて變つた父の此態度が、生の父に対する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつゝした。彼は養父母の手前始終自分に対してにこ／＼してゐた父と、厄介物を背負ひ込んでからすぐ慳食に調子を改めた父とを比較して一度は驚いた。次には愛想をつかした。(九十一)

実家に戻つてきた自分に対する実父の態度の変化に幼い健三(漱石)は驚き、愛想を尽かしてしまふ。そして「生の父に対する」愛情を「根こぎにして枯らしつゝした」という。なおかつ、養父からは、「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」といわれて「酷薄」と感じ、「子供心に淡い恐ろしさ」を覚える。実父と養父との狭間で不安に脅えている健三の境遇は、「海にも住めなかつた。山にも居られなかつた。両方から突き返されて、両方の間をま／＼してゐた。同時に海のものも食ひ、時には山のものにも手を出した。実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧ろ物品であつた」(以上、同前)と説明されている。

独立した人格として親に可愛がられる代わりに、利害心に駆られた二人の父の冷酷な待遇の前で現在のみか、これから先自分はどうなるのかという将来に対する不安を感じざるを得なかつた幼少年期の漱石の惨めな心境は、想像にあまりある。こうした乳幼児・少年期の不幸な体験が漱石の「心の核」の形成に決定的な影響を及ぼし、幼い心に刻まれた父親に対する否定的な観念や、大人の世界への不信感が漱石の「心の核」に存在し続けて、無意識のうちに創作意識にはたらきかけたと思われる。

漱石の不幸な体験の投影は、早くも『吾輩は猫である』（明治三十八年一月―三十九年八月）の、「ふと気が付いて見ると書生は居ない。沢山居つた兄弟が一定も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた」（一）と語る（吾輩）の母から捨てられた際の情景や、「人間ほど不人情なものはない」から「どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族の生活をするには人間と戦つて之を剽滅せねばならぬ」（同前）と気炎を吐く（白君）の姿に確認することができる。生後ただちに里子にやられたり、二度にわたつて養子に出されて母と生き別れた幼い日の漱石の境遇が捨て猫の（吾輩）のそれに重ね合わされて、父親の無残さによつて親子の愛を全うする幸福な家族生活を奪われたことに対する憤りが（白君）の気炎に潜められていると思われる。

幼少年期の大人の世界への不信感、頼みになるのは自己のみという、「自己本位」へとつながつていったので、漱石の文学の本質を成していると思われる「自己本位」の思想の形成にこの不安定な生い立ちも背後で作用したかもしれない。漱石が「自らの生い立ちにこだわり、境遇と人間の性格との関係性に意識的な作家」だといわれるゆえんもここにあるのではなからうか。

他方、漱石は母親には愛を強く意識したようである。母親について漱石は、「悪戯で強情な私は、決して世間の末ツ子のやうに母から甘く取扱かはれなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつて呉れたものは母だといふ強い親しみの心が、母に対する私の記憶の中には、何時でも籠つてゐる」（『硝子戸の中』三十八）と述懐している。このように母親にも世間並に甘やかされなかつたにもかかわらず、母に強い愛情を感じたのは、父親の待遇がそれほど苛酷だったことを意味するといえよう。漱石は、自分を可愛がつてくれる唯一の家族と信じて込んで慕つた実母を十五才の時失つたことで、かえつて母への思慕の念を強く抱くようになる。漱石が直接母親について語つたものは、いくつかの俳句を除けば、ほとんど『硝子戸の中』の三十七章と三十八章に尽きているが、それは、亡母への懐かしい情が滲んでいる表現で埋められた『硝子戸の中』でも最も美しい部分となっている。この例が示すように、小説の中に父親より母親を悪く描いた例はあまり見当たらない。自分の憧憬する幸福な親子像を描く際にも、植木屋の親子のように父親は除外されている（『門』の場合は異なる）ことも漱石の不幸な幼時体験に起因するといわざるを得ない。

父親から冷たく待遇された漱石の心には、その対極にみずからは味わつたことのない父性への憧憬の念が強く抱かれていたに相違ない。『い、ろ』の〈私〉が〈先生〉にひかれて強く影響を受けるのがその証拠である。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きてゐるか死んでゐるか分からない程大人しい男であつた。他に認められるといふ点からいへば何方も零であつた。それでゐて、此将棋を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往來をした覺のない先生は、欲楽の交際から出る親しみ以上に、何時か私の頭に影響を与へてゐた。たゞ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから、私は胸と云ひ直したい。肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。私は父が私の本當の父であり、先生は又いふ迄もなく、あかの他人であるといふ明白な事実を、ことさらに眼の前に並べて見て、始めて大きな真理でも発見したかの如くに驚ろいた。(上一二十三)

すでに言及した通り、父との關係が断絶している〈私〉は、父と〈先生〉の兩者を比較し、「本當の父」から受け継ぐべきものを〈先生〉に求め、「あかの他人である」〈先生〉の「力」が自分の「肉のなかに」「食ひ込」み、「血のなかに先生命がながれてゐる」と思う。つまり、〈私〉は、本來であれば、父子の關係から繼承されるはずの「生きた教訓」(下一二)を父の代わりに〈先生〉に求めようとしたのである。土居健郎氏は、〈私〉の〈先生〉に対するこうした感情を、精神分析用語の「父転移」によつて説明する。すなわち〈私〉が「かつて幼い時に父に向け、その後父に幻滅して吐け口を失つていた感情が、『先生』に新たな対象を見出して向けられた」と説明しているが、「父転移」の原因が父への幻滅にあるということは注目に値する。

この父子關係の断絶は小説のなかでは子供の不在によつても形象化される。「天罰だから」「子供は何時まで経つたつて出来つこない」(上一八)と思つている(こうした考えは、易者から「人に対して濟まない事をした」其罪が崇つてゐるから、子供は決して育たない)(一二三)といわれた『門』の御米からもみられる。〈先生〉は、「自分の心臓を破つて、其血を」〈私〉の「顔に浴せかけ」て〈私〉の「胸に新しい命が宿る事」(下一二)を期待して死んだ。〈先生〉の人格を「生んだ」かれの「過去」は、「人間の経験の一部分として」、かれより「外に誰も語り得」(下一五十六)ない貴重なものであり、それこそ父親が子供に伝えるべき「生きた教訓」であるといえよう。しかし、子供のない〈先生〉は、苦惱に満ちた自己の貴重な体験を「善悪ともに他の参考に供する」(下一五十六)ものにしたという「自分自身の要求」(同前)によつて、それが〈私〉を通して伝えられていくことを願う。

子供の不在は、『こゝろ』の〈先生〉夫婦、『門』の宗助と御米夫婦のほかに、『それから』の平岡と三千代夫婦、『行人』の岡田夫婦にもみられる。それは漱石文学における〈家族関係〉の理解のためには注意すべき問題だと思ふ。が、この問題の示す意味は、〈親子関係〉よりも、むしろ〈夫婦関係〉の問題として考えられると思われ、⁽²²⁾で、詳しい考察は他日に譲りたい。

『こゝろ』における子供の不在は、天罰で子供が出来ないという罪意識を〈先生〉にかかえこませながら、伝えるべき父性を〈私〉に向けて注ぐために用意されたものであった。この〈先生〉の欲求が父性を求める〈私〉のそれと一致することで、両者の人間関係が結ばれる。こうして両者は、互いに欲求する行為の対象者になり得た。これは、漱石の希求してやまなかつた父子関係のありかたの具象であると思われる。〈先生〉と、「先生の告白を成立せしめ、同時に意義あらしめ」⁽²³⁾るがため設定された〈私〉との関係のなかに「精神的親子」の関係が成立するという解釈⁽²⁴⁾が認められるゆえんもここにあるといえよう。

この関係の造型のうちにみられる漱石の父性への渴望は、『虞美人草』（明治四〇年六月―一〇月）においても、亡父の肖像画を通して父の精神的な意志や教訓が子に継承されるというかたちであらわされていた。書齋に掛けられている亡き父の肖像画は、甲野欽吾を常に見下ろしてかれに何かを語りかけてくる。

欽吾が仰ぐ度に壁間に懸つてゐる。仰がぬ時も欽吾を見下してゐる。筆を執るときも、頰杖を突くときも、暇寝^{うたたね}の頭を机に支ふるときも―絶えず見下してゐる。欽吾が居ない時ですら、画布の人は、常に書齋を見下してゐる。

見下す丈^{だけ}あつて生きてゐる。眼玉に締まりがある。（中略）甲野さんは此眼を見る度に生きてゐるなと思ふ。（中略）生きて居る眼は、壁の上から甲野さんを見詰めてゐる。甲野さんは椅子に寄り掛つた俛、壁の上を見詰めてゐる。二人の眼は見る度にびたりと合^あう。昵として動かずに、合^あわした俛の秒を重ねて分に至ると、向ふの眸が何となく働^せらいて来た。晴を閑所^{かんじょ}に転ずる気紛^{きまげ}の働ではない。打ち守る光が次第に強くなつて、眼を抜けた魂がじり／＼と一直線に甲野さんに追つて来る。（十五）

「良い年をして三遍も四遍も外国へ遣られて」家族と離れていた父親は、欽吾と話し合う機会を十分持てなかつた。父親に「聞きたい事、話したい事」がたくさんある欽吾は、父に会える日を待っていたのだが、父は「任地で急病に罹つて

頓死して仕舞つた」(以上、十五)。今では、三年前に父が帰朝したとき携えてきて書齋に懸けられている父の肖像画が欽吾のそばにあるだけだ。父との対話を通して人生の教訓が得たかった欽吾は、父の趣味と精神が隔々まで浸されている書齋の壁に懸けられている、この父の肖像画の「活きてゐる」眼を日々みつめているうちに、父の意志や教訓を悟るようになっていた。すなわち、壁の上から見下ろす父の「活きてゐる」眼は、日々それを見つめる欽吾に「魂」となって語りかけてきたのである。この無言の対話を通して、「余計な事を云ひに生れて来た男」「計画ばかりして一向実行しない男」(以上、一)と周囲から評されている欽吾は、継母と異母妹藤尾との嫌悪すべき生活を断ち、すべての財産を藤尾に譲つて父の肖像画だけを持って家を出ようと決心するに至る。瀬藤芳房氏によれば、欽吾においての肖像画は、父の唯一の精神的遺産であり、「女」の介在を拒否する「男性的意志」、父から子へと継承さるべき厳しくも懐かしい「父性」そのものと化している⁽²⁵⁾ということになる。

小説のうちに造型されている、このような父子像は、漱石の渴望した父子像の具現といつてもいいすぎではあるまい。ただ、父性への渴望が、実父ではない赤の他人や、死んだ父の肖像画に向かつて求められているということは、何を意味するのだろうか。思うに、それは、漱石が実父からも養父からも情愛のこもつた優しい父性を感じ得なかつた実体験における父性の欠損から、虚構の小説世界のなかであつても、父性の生々しい表現にリアリティを感じなかつたせいかもしれない。あるいはこうも言い換えられようか。真の父性を示した例のない実父に対しての否定的な観念が小説世界での父性の表現を拒否したせいかもしれない、と。

六

「近代家族」と呼ばれる核家族の先駆的形態を最も鮮明に対象化し検証した作家といわれている漱石の小説が、いまなお現代のわれわれの生に重い問いかけを突きつけてくる。それというのも、かれの小説が人間存在の基本である〈家族関係〉を通して人間の本質をつきつめようと試みたからであらう。家族の危機が声高に叫ばれている今日、漱石の小説に呈されている〈家族関係〉を考察してみることが、漱石文学の本質の理解のみならず、現代人の生のありかたを見つめなおすためにも有意義であると思われる。

『い、ろ』には、漱石の小説に見られる〈親子関係〉の諸特徴、すなわち親の不在、〈親子関係〉の断絶、子供の不在、父性への憧憬などがことごとく揃っている。これらは登場人物の人間関係の葛藤を通してその主題にまで影響を及ぼしているが、そこに漱石の乳幼児・少年期の不幸な体験によって形成された「心の核」なるものの投影をも確認し得るのである。それゆえに、登場人物の〈家族関係〉（親子関係）は、漱石文学の解読のポイントの一つとして注目すべき事柄であるといえよう。

注

- (1) 石原千秋氏の「い、ろ」作品研究史（『近代小説研究必携』第一巻、有精堂、昭和六三年四月、所収）によると「三百篇を超える」といふ。
- (2) 荒正人『漱石文学全集 六卷解説』、集英社、昭和四六年十二月。引用は『漱石作品論集成』第十巻、桜楓社、一九九一年四月、一五八頁。
- (3) 同前書、一六〇頁。
- (4) 三好行雄氏は「い、ろ」の解題で「確かに、物語のレベルで『い、ろ』の収束はついていない」（『別冊国文学 夏目漱石事典』、学燈社、平成二年七月、五六頁）と指摘している。
- (5) 小宮健隆氏（『夏目漱石』、岩波書店、昭和十三年七月。『漱石の芸術』、岩波書店、昭和十七年十二月）に代表される。
- (6) 石原千秋「『い、ろ』のオイディプス―反転する語り―」（『成城国文学』、一九八五年三月）参照。
- (7) 小森陽一「『い、ろ』を生成する『心臓』」（同前書）参照。
- (8) 土居健郎氏は〈先生〉と〈私〉との間に「同性愛的感情」の存在を指摘（『漱石の心的世界 漱石文学における「甘え」の研究』（角川選書五）、角川書店、昭和五七年十一月、一五二頁）し、漱石の同性愛的な傾向については吉本隆明氏も言及している（『漱石の主題』、春秋社、一九八六年二月、六〇頁）が、島田雅彦氏は「一つは「先生」と自殺したKによる、今一つは「私」と自殺した「先生」による男だけの世界である。それはパートナーの死によって初めて意識化される同性愛といえるものである」（『漱石を書く』（岩波新書三五）、岩波書店、一九九三年十二月、一五四頁）と、〈先生〉とK、〈先生〉と〈私〉の関係には同性愛の要素が

含まれていると捉えている。

- (9) 『「こころ」論—「自己本位」をめぐる—』(韓国日本学会『日本学報』第十輯、一九八六年十一月)。
- (10) 鈴木秀男『幼時体験—母性と父性の役割—』、北洋社、一九七九年七月、十三頁。
- (11) 同前書、二二五頁。
- (12) 同前書、十五頁。
- (13) こうした捉え方とは異なって「上・中」と「下」は、「相互に対等であり対話的であり、相互干渉的であると同時に相互に相対化しあう関係」だと見る論者もいる。(小森陽一『「こころ」における同性愛と異性愛—「恋」と「罪悪」をめぐる—』『総力討論 漱石の「こころ」』、翰林書房、一九九四年一月、所収)一四四頁。
- (14) 中根千枝『家族を中心とした人間関係』(講談社学術文庫)、講談社、昭和五二年二月、一〇一頁 参照。
- (15) たとえば猪野謙二氏は「自己の「金力」とそれに伴う一種の「権力」をもって、いつしか友人Kという「他人の個性」を没却し、自己の内面生活の埒内に強力にかれをたぐりよせようとした先生のあやまち」(『「心」における自我の問題』、『世界』三六号、岩波書店、一九四八年十二月。引用は『漱石作品論集成』第十卷、四八頁)と捉えているし、作田啓一氏は「先生」は、たとえば策略のいけにえになったとしても、お嬢さんが結婚に値する女性であることを、尊敬するKに保証してもらいたかった。「そしてまた同時に、このような女性を妻とすることをKに誇りたかった」からであると解釈している。(師弟のきずな—夏目漱石『こころ』)『個人主義の運命—近代小説と社会学—』(岩波新書(黄版)一七二)、岩波書店、一九八一年十月、所収)一三七頁。
- (16) 前掲注13小森陽一論文、一五六頁。
- (17) 同前書、一六一頁。
- (18) 佐々木充「母の不在—漱石小説の基本設定—」(『漱石推考』、桜楓社、平成四年一月、所収)一一四頁。
- (19) 荒正人『漱石研究年表』、集英社、昭和四九年十月、十五—十六頁 参照。
- (20) 石井和夫『Saito 夏目漱石』、有精堂、昭和五九年九月、十四頁。
- (21) 前掲注8土井健郎の書、一五九頁。
- (22) 緊密な夫婦関係と子供の不在との相関関係がみられるからである。(平岡敏夫「漱石における家と家庭」『講座夏目漱石』第一巻、有斐閣、昭和五六年七月、所収)参照。
- (23) 三浦泰生『漱石の「心」における一つの問題』(『日本文学』、一九六四年五月)。引用は『漱石作品論集成』第十卷、五六頁。

(24) 同様の論として、「精神上の父としての先生」(小宮豊隆『漱石の芸術』、岩波書店、昭和十七年十二月、二五二頁)。「精神上の、あるいは魂の上での親子」(前掲注23論文。引用は前掲注23の書、五五頁)。「精神的親子」(瀬沼茂樹『夏目漱石』、東京大学出版会、昭和四五年七月、二四四頁)などがあるが、類似した言い方として「精神的同族意識」(熊坂敦子『こゝろの世界』、『夏目漱石の研究』、桜楓社、昭和四八年三月、所収)一六二頁。「精神的同族」(江藤淳『明治の一知識人』、『決定版夏目漱石』、新潮社、昭和四九年十一月、所収、一〇三頁)などもある。

(25) 瀬藤芳房『虞美人草』における父の「肖像画」(『新編夏目漱石研究叢書』一、近代文芸社、一九九三年四月、所収)四九八頁。
 ※本文の引用は、昭和三十一年五月―三十一年十月、岩波書店発行の『漱石全集』に拠った。ただし、旧字体を新字体に改め、ルビは適宜省略した。

〔付記〕本稿は、財団法人日韓文化交流基金の訪日研究助成を受けて作成された。